

滝川市



北海道滝川市

面積115.82平方キロ、人口約45,000人。農業が盛んで、リンゴ街道、フルーツ街道、アスパラ街道、コスモス街道など、さまざまな街道があり、地域おこしにも注力。1990年に設立された滝川市国際交流協会(現(社)滝川国際交流協会)を中心に、95年からJICAの研修事業に協力し、マラウイをはじめ開発途上国の研修員を受け入れている。市民がマラウイの研修員を訪ねるスタディーツアーなども実施している。



松尾ジンギスカンを訪問したアフリカの研修員たち。工場で説明を受ける研修員の様子を国際協力実務研修の参加者らが視察する



滝川市の国際協力を支える「滝川オールスターズ」。「組織という枠の中で大変なこともあると思いますが、それぞれの地域の特性を生かして頑張ってください」と(社)滝川国際交流協会の前田康吉会長(中央)

「滝川流」国際協力の秘訣を探る

札幌市から北へ電車で約1時間。2008年12月中旬、真っ白な雪に覆われた滝川市の丸加高原伝習館で、地域の国際協力に熱意を燃やす13人の大人たちが議論を交わしている。彼らは、北海道、東北地方の自治体やNGOなどで働く、地域の国際協力の担い手たち。JICA札幌主催の「平成20年度地方自治体職員等国際協力実務研修」に参加するため、各地からやって来た。



地元の産物をリストにして、研修プランを練る参加者たち

この研修は、「国際協力を日本の文化に」をモットーにするJICAが、地域の国際協力を担う人材を育てるべく、全国各地で実施してきたもの。北海道では、平成19年度までJICA札幌を会場としていたが、今回は道内でも先駆的に国際協力に取り組み滝川市に研修の舞台が移された。その目的は、滝川市の事例を学びながら、地域の国際協力に携わる参加者たちが共に考え情報を共有するためだ。

同市は道内有数の稲作地域。タマネギ、リンゴ、菜種、小麦、ソバ、トマト、トウモロコシなどの栽培も盛んだ。今から

13年前、その農業のノウハウを開発途上国に伝えようと、滝川市国際交流協会(現(社)滝川国際交流協会)が中心となり、JICAと連携してマラウイの青年を受け入れ始めた。今では、ほかのアフリカアジアの国からも研修員を受け入れている。

研修初日は、同協会の山内康裕事務局長をはじめ、滝川市で国際協力にかかわる精鋭たちによる講演が行われた。「最初は『国際協力って何?』という人がほとんどでした。でも口コミで国際協力の輪が広まり、次第に協力してくれる農家、ホームステイを受け入れてくれる家庭が増えていきま



東北チームの研修モデルを発表する(財)宮城県国際交流協会の伊藤友啓さん

した。今では、町中に外国人がいることが普通の光景になっています」と山内さん。リンゴ農家の中村三千男さんは、受け入れた研修員が帰国後にどうしているかを見るためにマラウイを訪問した。「同じリンゴでも、マラウイと日本では品種が違う。日本のやり方をそのまま教えるのではなく、現地の状況を知り、それに応じた技術指導が必要。国際協力は日本の農業のあり方を振り返るきっかけにもなった。これからも地方の一農家として貢献できれば」と語る。

08年12月、滝川市には、アフリカ6カ国からJICAの青年研修「英語圏アフリカ中小企業振興コース」の研修員が訪れていた。その日は、味付けジンギスカン発祥の老舗「松尾ジンギスカン」の製造工場の



3日間の研修には、参加者に加え、JICA札幌、JICA東北の職員、道内の国際協力推進員なども参加した

視察。一行の視察に同行した参加者たちは、歌原清事務取締役の話に耳を傾けながら、地域産業を活用した国際協力のヒントを学んだ。

国際協力をリードするキーパーソンに

研修2日目の午後は、新潟県の長岡市国際交流センター「地球広場」センター長・羽賀友信さんの特別講演が行われた。「地域で国際協力を発展させるためには、みんなを引っ張っていく。キーパーソンが必要」という羽賀さんの言葉に、「同が深くうなずく。

その後は、北海道と東北の2チームに分かれて、JICAの研修員受け入れを想定したプログラムづくりに取り組んだ。北海道は「エコ」、東北は

地域を元気にする

国際協力を始めよう

日本国内でも「国際協力のまち」として名高い北海道滝川市。その地を舞台に、地域の特性を生かした国際協力を学ぶ研修が行われ、北海道、東北地方の地方自治体などの職員が参加した。

「環境と農業」をテーマに、各地で国際協力につながりそうな資源を発掘していく。あえて、廃炭坑、廃スキー場の見学を取り入れたのは北海道チーム。「いい面だけでなく、失敗例も見てもらい、研修員と共に地域振興のアイデアなどを考えたい」。一方、東北チームは、土地改良区、農協、道の駅の視察など、地域の特色をふんだんに盛り込んだ。「両チームとも、それぞれの地域性がよく出たプログラム」と、ファシリテーターを務めた(財)北海道国際交流センターの池田誠事務局長。羽賀さんは「いろいろな人の視点が入ると、地域の良さが再発見できますね」とコメントした。研修終了後は、「国際協力という枠で、異業種の人の意見を聞くことができた」(仙台市八木山動物公園・小野寺順也さん)、「今回、さまざまな地域の人たちと知り合うことができた。このネットワークを生かして、何か新しいことができれば」(NPO法人赤平市民活動支援センター・佐藤智子さん)など、頼もしい声が寄せられた。今後は彼らが地域のキーパーソンとなり、地元色あふれる国際協力をリードしていくに違いない。